

# C・Sだより

令和6年10月4日  
三校合同発行

第2回学校運営協議会は、8月1日、赤塚中学校を会場に小・中合同で開催されました。全体会では、各校協議委員の自己紹介や、小・中連携活動の概要について説明がありました。その後、4つの分科会に分かれ、それぞれのテーマに沿って活発な議論が交わされました。今回のC・Sだよりでは、分科会の様子についてお知らせします。

## 第1分科会「学習指導」 テーマ：主体的に取り組んでいる姿・関わり合っている姿

### ◆『児童生徒の主体的に取り組んでいる姿・関わっている姿』について各校の実践紹介 《木山小学校》

- 教科によっては複式授業となり、上の学年の経験を下の学年に伝達できる。例えば1・2年生の音楽では、演奏の見本を示したりする姿が見られる。
- 少人数がゆえに受け身になりがちだが、今年度は子どもたちが主体的に取り組んでいる姿・関わり合っている姿が見られるようになってきている。
- 話し合い活動を取り入れることで、気づきがあり理解が深まっている。

### 《赤塚小学校》

- 2年生の新聞紙を使った図工授業では、複数で関わる中でどんどん新しいものができ、作品作りが発展していった。
- 3年生総合学習の西区のすいかのPR活動では、子どもたちが主体的にやりたいことを考えた。初めは恥ずかしがっていたが、積極的な友だちの姿に触発され、お客さんへ声をかけるようになった児童がいた。
- 5年生では、自然体験教室について6年生にインタビューをした。6年生が自分たちの体験をもとに優しく教えている姿が見られた。

### 《赤塚中学校》

- 赤塚中学校の生徒は、小学校の時から取組により、自分の考えを伝えることができると感じる。
- 学年ごとに特徴（良さ）がある。3年生は関わり合う力が高く、修学旅行の際には積極的に外国人に声をかけ一緒に写真を撮る活動ができた。
- 学校評価では全学年が“ペア活動”“グループでの学び”に肯定的である。



### ◆『児童生徒の実態について』の意見交換

#### 《参加者からの意見》

- ☆中学生が校外で輝ける場があるとよい。
- ☆小学校での複式は大変だと思う。教え合うのはいいが下の学年はそれでは不十分ではないかと感じる。
- ☆多様性の時代、一人一人を見る、主体性を育てることが必要。学校と地域が一体となって取り組めたらと思う。

HOP 小学校 多様な場面の体験 ⇒ STEP 中学校 深める ⇒ JUMP !

## ◆いじめの実態と対応策・未然防止への取組について各学校からの説明

## ＜各学校のいじめの実態＞

- ・軽くぶつかられたり、叩かれたり、蹴られたりする。
- ・冷やかし、からかい、悪口やおどし、嫌なことを言われる。
- ・仲間外し、集団による無視  
など

## ＜対応策・未然防止への取組＞

- ・年3回のいじめアンケートを実施
- ・早期発見と対応を重視
- ・児童、生徒のきめ細やかな観察
- ・いじめ未然防止教育プログラムの実施
- ・自己肯定感を高めあう活動  
など

## 《木山小学校》

今年度の取組として、学校生活の中で問題になっていることについて、総務委員会が解決策を提案し、児童朝会の場を使って縦割り班で話し合った。また、縦割り班遊び後には振り返り活動を行い、お互いの頑張りを認め合い、自己肯定感を高めるようにしている。

## 《赤塚小学校》

7月までのいじめの傾向として、感情を言葉で伝えられず手が出てしまうことが多い。また、伝えたとしてもうまく相手に伝わらず、誤った方法で自分の感情を相手に伝えてしまうことも多い。相手の気持ちを思いやり、自分の気持ちをどのように伝えていくか繰り返し丁寧に教えていきたい。

## 《赤塚中学校》

4月から夏休み前まで昼休みは教室に教員を1人配置。他の教員は廊下や体育館を見回っていた。トラブルが起きない環境づくりを行っている。また日頃から傾聴を大切にしている。

## ◆「いじめを防止するために学校・家庭・地域でできること」についてグループ協議

## 《A グループ》

☆いじめに対する認識がはっきりしていない子が多い。早い段階で「いじめ未然防止教育プログラム」を実施する必要がある。

☆子どもたちの自己肯定感を高めるために小さい時から感謝の言葉を伝えていくことが大事。

## 《B グループ》

☆小さい時に心の温まる経験をすることが大事。（地域のスポーツクラブ、学校の授業や活動、行事等）

☆特に1～4年生でしっかり道徳を学習することで心を育てる。

☆早期発見が大事。アンケートだけではなく日ごろの会話から早期発見に努める。

☆加害者、被害者双方に寄り添う対応が大事。

## 《C グループ》

☆親としてよき理解者でありたい。

☆地域の方が子どもたちを見守ってくれたり声をかけてくれたりすることが大切であり心強い。何かの時に学校と地域の橋渡しの役割になってくれる。



## ◆佐潟クリーン活動について

小中一貫教育の一環として、赤塚小学校、木山小学校の6年生も参加。学校間や先輩後輩間の交流ができ、中学校の雰囲気を知れる場となっている。

## 《クリーン活動に参加した小学生の感想》

☆中学生は自分からどんどん仕事を見つけて取り組んでいたの、今後、中学生を見習って自分も成長していきたい。

☆活動を終えて、達成感があった。

## 《CS委員からの意見・感想》

☆なぜ佐潟の泥とアシを回収するのか活動の意義を深めてから参加した方がさらによい活動になる。

☆子どもたちにとっては、佐潟の環境を知るよい経験になる。

☆昨年メディアシップで赤塚小学校と赤塚中学校が佐潟の環境保全についての発表があった。とてもよい発表だった。

## ◆地域連携を中心とした総合学習の取組（各校の報告）

## 《木山小学校》

○地域の方々の協力を貰いながら、サツマイモ栽培（1・2年生）と「町たんけん」を通して地域を知る学習（1・2年生）、スイカの栽培・収穫・販売を通して木山の魅力を知る学習（キャリア教育／3・4年生）、佐潟・砂丘を知る学習（5・6年生）にそれぞれ取り組んでいる。

○新潟国際情報大学の澤口先生から砂丘の成り立ちや地形の特徴などを教えていただき、実際に砂丘に出かけた。学んだことをまとめ、発表した後、地域のみなさんにも砂丘のことを知ってもらおうとパンフレットを地域や保護者に配布した。

○地域教育コーディネーターさんと総合的な学習の目標を共有したことで、積極的に地域に出かけ、たくさんの地域の方に協力していただき学びを深めることができた。

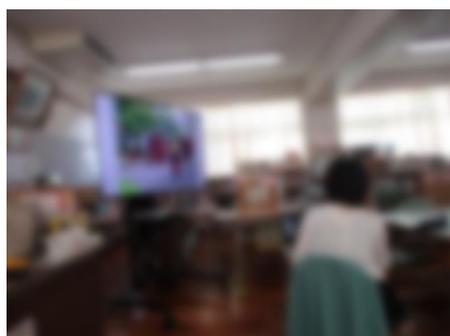
## 《赤塚小学校》

○生活科と総合の学習を活用して、6年間、赤塚の「ひと・まち・しぜん」について学び、地域の魅力について理解を深めている。

○「スイカの植え付け・ハウス見学・大根種まき」（3年生）、「佐潟の生き物・植物の話、潟舟体験・昔の佐潟について」（4年生）、「佐潟物語」（ハスの芽出し・バケツ移植・ハスの実試食体験）（5年生）、「佐潟物語」（ハスの移植・レンコン掘り、カメ捕獲体験、赤塚の歴史、中原邸見学）（6年生）

## 《赤塚中学校》

○SDGsに取り組み、昨年に続き職場体験が実施できた。地域内および隣接地域の18事業所へ出向いて体験。（2年生）



第4分科会では、「子どもとのふれあいから始まるレジリエンスの育成」と題して、認定レジリエンス研修講師 柏 美智（かしわ みち）様からご講演をいただきました。一般保護者の方も含め、約20名が聴講しました。

### 《講演の概要》

レジリエンスとは、「困難をしなやかに乗り越え回復する力」「生きる力」であり、そのレジリエンスを発揮させる源はふれあいである。そのふれあいから「安全基地の自覚」、「信頼関係の形成」、「コミュニケーションの促進」が育まれる。また、ふれあいから「愛着」＝確固たる絆が生まれる。絆を結ぶのに遅すぎるということはない。

ふれあいの方法は子どもの成長段階に応じて変化させていけばよく、身体的ふれあいが難しい年齢になったら情緒的ふれあいに変えればよい。情緒的ふれあいは幼い頃からの身体的ふれあいがあることが前提ではあるが、絆を結ぶのに遅すぎるということはない。声をかけ、気をかけ、見てあげることが大切である。



### ○レジリエンスには困難が必要

生きていくうえで困難を排除することは不可能である。安全基地を確保しながら小さな困難を経験させ、家庭・学校・地域のサポートを得ながらその困難からの回復を経験させることが大切である。その経験をするすることで、SOSを出せる、他人に頼れる、助けを求められるといったしなやかな心が育成される。レジリエンスの発揮は人間を成長させる。

### ○まとめ

子どもたちがレジリエンスを発揮するためには、ふれあいの経験が必要です。今日から家族とのふれあいを始めてみましょう。ふれあいの経験はずっと体が覚えています。

### 《参加者の感想》

- ☆「ふれあいによって絆を結ぶことに遅すぎるとはいない」との心強い言葉が心に響いた。たとえ子どもが反応してくれなくても、あいさつ等の声掛けを続けて、情緒的ふれあいを意識して実践していこうと思う。
- ☆家で何気なくしていることが“ふれあい”なんだなと思った。このまま続けて子育てしていこうと思った。
- ☆これからもふれあえるうちにふれあって、絆を作っていきたいと思った。
- ☆困難を経験させ、回復も経験させる。とても大切なことだと思った。自分の子育ては、「転ばぬ先の杖」だったように思う。
- ☆幼児期に正しいふれあいの経験があれば、他者とも適切にふれあうことができるのだと納得した。担任している子どもたちに安全基地と思ってもらえ、自己肯定感が高まるよう情緒的ふれあいを大切にしていきたい。

